ぼくらの

MANKEN事情

「12月の誕生日」

忍恭弥

あたしは、明日17歳になる。
今まで生きてきて、誕生日が来てほしくないと思ったのは初めてのことだ。
幼い頃は、両親のくれるプレゼントやバースデーケーキが楽しみだったのに。
17歳に、なりたくない。

彩佳(あやか)は12月20日の生まれだ。
世間ではもうクリスマスが間近なだけに、この時期の誕生日は家族やよほど親しい人でないと忘れられることも多い。
彩佳(あやか)は期末試験の回答を終えると、窓の外を見ながらそんなことを考えていた。今日は12月19日。期末試験の最終日。明日は試験休みだ。
(家族以外に祝ってもらえへん誕生日も、なんか淋しいなあ…)
窓から見える空は、瀬戸内(せとうち)の冬を象徴するかのように青く済んでいた。
やがてチャイムが鳴り、答案は回収されて期末試験は終了となった。球技大会がこのあとの日程にはあるものの、参加しないメンツにとっては、終業式の1日前までは自由時間だ。
クラスメイトの雑談を聞きながら、彩佳(あやか)は鞄を肩にかけた。運動が苦手な彩佳(あやか)にとって、球技大会は苦痛以外のなんでもない。
「じゃあね」
「あ、島。ばいばい!」
「またな~」

そんな簡単な挨拶を交わして、彩佳は教室を出る。
向かう先は、生物講義室だ。
そこに、いつもの仲間たちがいる。

漫画研究部は、数ある芦屋高校の部活動の中では新しい方だ。
彩佳たち今年の２年生がまだ９代目。今年の１年生でやっと創部10年になる。伝統もなければ格式もないが、創部の精神だけは細々と受け継がれているようだ。
彩佳は、そんな漫研に、今年の夏に入部した。それまでは他の部にいたのだが、開店休業状態のその部に見切りを付けたのだ。それ以外にもう一つ理由がある。
「よう、島！」
「あ、大石クン」
そう、今まさにすれ違おうとしているこの大石和将だ。
彼に近づきたいがため、漫画が得意でないにもかかわらずこの部に入った。だが、憧れに似た気持ちは今もそのままだ。
「あれ？　大石クン、部行かへんの？」
リュックを背に階段を下りようとする大石に、彩佳は驚いてそう聞いた。

「まあな。今日はちょっと野暮用でな」
大石はにっと笑う。
「野暮用って？」
「バッティングセンター！　日曜に草野球の助っ人やからな。試合すんの久しぶりやし、調整しとかんとな」
彩佳（あやか）の問いに、大石はうきうきとそう答えた。大石は元々中学の時は野球部だったのだ。今でこそ漫研で漫画を描いているが、夏休みには相棒の鴻池（こうのいけ）を連れ出して早朝からランニングやキャッチボールに勤しむほどのスポーツ少年なのだ。
「ガンバってね」
「おう。じゃあな！」
大石は彩佳（あやか）の激励に軽く右手をあげると、まるでスキップでもするように階段を下りていった。漫画なら、吹き出しの中に音符でも入れたくなるような光景だ。
（クリスマスイブに野球なんかするんや）
その背中を半ば呆れながら見ている自分もどうかと思いながら、彩佳（あやか）は３階の生物講義室にもう一度足を向けた。
（…じゃあ、今年はみんなでパーティせーへんのかな？）

去年、漫研のメンバーは1年生だけ集まって大いに騒いだらしいと聞いた。それを今年も期待していたのだが、幹事の和美(かずみ)をはじめ、部の仲間からはそんな話は出ていない。

(…楽しみにしてたんやけどなあ、結構)

そう思った時に、部室にあてがわれている生物講義室の前についた。

中からは、賑やか話し声が聞こえる。もう誰かが来ているようだ。

「おはよ〜」

そう言いながら、ドアを開ける。ざっと中にいたメンバーが振り返った。

「お〜す、島ちゃん」

そう言って笑顔を向けてくれたのは、去年同じクラスだった片山友紀(かたやまともき)。

「うぃっす!」

そのあと、おなじように笑いかけてきたのが、大石の相棒、鴻池大洋(こうのいけともひろ)。

「おはっよ、島ちゃん」

最後に笑ったのが、部の最後の良心と言われている関口陽(せきぐちひなた)だ。

すでに雑談に花を咲かせていたらしい。

「鴻池(こうのいけ)クン、大石クン今日来ーへんって」

机に鞄を降ろしながら、まず彩佳(あやか)はそう鴻池(こうのいけ)に話を振った。

「ああ、聞いとる。今日はバッティングセンターやって張り切っとったからな」
鴻池はそう言って笑った。大石と対照的に、この鴻池はインドア専門だ。カメラとパソコンが趣味だというのだから、好対照と言えた。
「それはさておき、明日誕生日やろ、島さん」
「あっそうや、忘れとった、島ちゃん明日誕生日やん」
鴻池の言葉に、友紀がそう手を打った。
「なんで知ってんの、鴻池クンが？」
鴻池の言葉にきょとんとしながら、彩佳はそう聞く。すると鴻池はニカッと笑った。
「まあ、宴会会長としてはやな、部員の誕生日くらい押さえとかんと話にならんがな」
「嘘くさい」
「ウチもそう思う」
演説ぶる鴻池に、友紀と陽は速攻でツッコんだ。
「なに言うてんねん。ちゃんと覚えとおで。友紀さんは10月15日やろ、陽さんは2月4日やろ、大石は1月2日やろ…」
「もうええ、もうええ。ようわかったわ」
鴻池の言葉に、友紀は呆れたように手を振る。それを見て、彩佳は思わず笑った。

「漫才しとお場合やないで」
陽(ひなた)も思わず苦笑いだ。
「ま、それはさておきやな。せっかくの誕生日やし、なんかしようや」
「誕生日パーティってヤツか」
「そりゃあ、ええな」
彩佳(あやか)をのぞく三人が早くもそう意見の一致を見る。
「え、でも、場所ないし、家も無理やし…」
思わずしどろもどろになる彩佳(あやか)に、三人は打ち合わせでもしたようにニッと笑う。
「なに言うてんねん。ここがあるやん、ここが」
友紀(ともき)はそう言いながら、部室の床を指す。
「いくら試験休みや言うたかって、先生らは来とおし運動部や演劇部は普通に部活しとおからな」
「校舎は開いとおやんか」
鴻池(こうのいけ)と陽(ひなた)も口々に言った。
「じゃあ…」
「そや。ここでやろうや。ささやかでもな」

驚く彩佳に、友紀は笑いかけた。

その日はそれ以上のメンバーは集まらず、その話もほとんど話題に上らないまま解散の時間になった。

彩佳と友紀は家が近い。中学の時も同じクラスになったこともあって、この交流がこの漫研になっても続いているのだ。今では、お互いを親友と呼ぶこともできる。そんなとこもあって、友紀は彩佳の沈みがちな表情になんとなく気づいたようだ。

「どないしたんや、島ちゃん。なんか考え事か？」

電車を待つ駅のホームで、友紀はそう切り出した。

彩佳は小さく頷く。長い髪を木枯らしが揺らした。

「17歳になるの、イヤやなあって思って…」

彩佳の呟きに、友紀は思わず怪訝な顔をした。

「あたし、もう17やねんけど」

「そりゃあ、わかっとおけど…」

そう言って、彩佳はもう一度ため息をつく。

「なんか、このまま年取らへんでいれたらなあ…って」

「なんや、そんなことかいな」
友紀はわざとそう言った。
彩佳の思いはわからなくはない。彩佳は今が楽しいのだ。その楽しさが永遠に続けばいいと思っている。先は見えない。だからこそ、そのままでいたいのだ。
「そんなことって」
「ま、島ちゃんの気持ちはわからんでもないけどな」
彩佳の抗議に、友紀はそう言って笑った。部の幹事として部の総まとめをする和美も、5月の誕生日に同じことを言っていたのだ。
誰もが、今が黄金時代だと気づいている。
「ま、明日はイヤでも来るし、どうやっても年は取んねや」
友紀がそう言った時、電車が入ってきた。
彩佳は小さく頷いたようだった。

駅で彩佳と別れてから、友紀は考えをめぐらせていた。どうすれば、少しは彩佳の気持ちが晴れるのだろうか。
「…あかんなあ。あたしだけじゃなんも思いつかんわ」

そう言って、友紀(ともき)は頭をかきながら電話口へ向かう。こういう時に頼りになる人物に任せてしまおうかと思えたのだ。

『もしもし？』

「あ、鴻池(こうのいけ)？」

『はいはい、友紀(ともき)さんかいな』

電話に出たのは鴻池(こうのいけ)だ。先にも書いたが、彼のあだ名は宴会(えんかい)部長だ。とにかくお祭りが大好きな企画(きかく)好きのクセに、自分が関わらないことには乗り気でないと言う冷めた部分も持っている。

「明日のパーティなんやけどな、島ちゃんがちょっと落ち込んどおみたいやから、なんか考えたってくれへん？」

『なんかねえ…』

電話の向こうの鴻池(こうのいけ)は、思案をめぐらせているらしい。しばしの間、受話器は無音状態が続く。

『おっしゃ、わかった。任しとき』

唐突に受話器から鴻池(こうのいけ)の声が飛び込んできた。もう何か思いついたようだ。

「じゃあ、頼んだで」

『ああ。ほなまた明日な～』
のんきな声を残して電話は切れた。
「もう任しといても大丈夫やな」
友紀(ともき)はそう呟くと部屋に戻ってコートを羽織(はお)った。プレゼントを買いに行こうと思ったのだ。

一方の鴻池(こうのいけ)は、電話を切ると早速ジャンパーを羽織(はお)って自転車に飛び乗った。向かう先は決まっている。自転車爆走少年の鴻池(こうのいけ)はもの凄い勢いで傷だらけの自転車をこぎ、目的の施設の前でドリフトさせながら自転車を飛び降りた。そうして、その施設に入るなり、目的の人物を見つける。
「おっす、大石！」
打撃ケージから出てきたばかりの大石は、予想外の人物の登場に思わず目を白黒させた。
「鴻池(こうのいけ)!? なんやこんなとこに」
「ちょっと協力したってや」
「協力？」
いきなりの話に、大石は怪訝(けげん)な表情を返す。

「あした島さんの誕生日やろ？　なんか盛り上げないかんみたいやねやわ」
「それで？」
「大石には、バースデーケーキを買って、10時に学校まで持ってきてほしいんや」
「は？」
鴻池の話に、思わず大石は素っ頓狂な声を上げる。
「なんや10時って？　俺そんな話聞いてへんぞ」
「そりゃあ、そうや。さっき決まってんから」
鴻池はけろっとした表情でそう言い放つ。
「ということで、そう言う役割分担で頼むわ。あ、ケーキはチョコケーキにしてな。俺生クリームよう食わんから」
鴻池はそれだけ言うと、じゃっと右手をあげて来た時とおなじように去っていく。
「ったく、しゃあないヤツやなあ、鴻池も片山も」
大石は鴻池の背後に友紀がいることを見通してそう言った。
「しゃあねえ、つき合ったるか」
大石はそう言うと、また空いた打撃ケージに入っていく。

夜が更けてきた。
六甲颪(ろっこうおろし)は、容赦なく北側の窓を揺らす。
彩佳(あやか)は電灯を消し布団に潜り込むと、カーテンの向こうの星空を思った。
（もうすぐ、17歳なんやな…）
たくさんのことがあった1年だと思う。
そして、次の1年もたくさんのことが起こるだろう。
6月の記念祭が終われば、後輩達に部を任せて引退することになるのだ。そうなれば、来年3年生になるメンバーのほとんどが部には出てこなくなるだろう。
（それは、淋しいなあ…）
そう思うと目を閉じる。
賑(にぎ)やかな部室。明るいメンバーの笑い声。時にはケンカもしたが、大好きな場所なのだ。
（本当に、時間が止まってくれへんかな…）

朝が来た。
彩佳(あやか)はいつもと同じ時間に起きて、身支度を整える。

両親や妹からは、朝イチで「おめでとう」の言葉はかけてもらった。
その言葉に複雑な笑顔を返す。
「行ってきます」
そう言って家を出て、いつものように電車に乗った。
（なにも、かわらない…。かわるはずない…）
流れる景色を見ながら、彩佳はそう言い聞かせる。
それでも、見えない内に、少しずつ時間は経っていく。
それこそ、容赦もなしに。

学校へ着くと、部室にあてがわれている生物講義室はしん…としていた。いつもなら、誰かがやってきては賑やかに騒いでいるはずの場所なのだ。それを、まったく意外な静けさが覆っていた。
（誰もいないのかな…？）
彩佳はそう思いながら、ドアを開けた。
パンッ!!
大きな音が響く。

「きゃっ!!」
思わず彩佳は頭を抱えて首をすくめた。
そこへ降り注ぐ色とりどりの細いテープ。
そーっと目を開けると、友紀と陽がクラッカーを持って笑っていた。
「トモさん！　陽ちゃん！」
彩佳の顔にパッと笑顔が広がる。
「ハッピーバースデー、島ちゃん」
「ありがとう！」
二人の手から、プレゼントが彩佳の手に渡る。友紀からは詩集が、陽からは、この日のために描いてくれたであろう彩佳のためだけのコピー本が。
彩佳は胸を温かくしながら、部室の様子を見た。
黒板には「Happy Birthday Pin^2」と色とりどりのチョークで大書きされている。横の似顔絵は、いつも部員の似顔絵を描いている鴻池と友紀のものだ。いつものように向かい合って並べられた机には、ジュースのペットボトルと紙コップ、スナック菓子に焼き菓子が並んでいた。横にいつものようにＵＮＯやトランプがあるところから、このまま夕方まで長居する気でいるようだ。

「他のみんなは？」
彩佳はそう聞いた。昨日部室にいた鴻池はともかく、彩佳にとって来てほしい人物である大石はどうなのか。それ以外のメンバーは。
「鴻池と大石はあとで来るで。和クンやウメちゃんたちは捕まらへんかったわ」
友紀はそう苦笑いする。本当は全員呼んでやりたかったのだが、さすがに昨日の今日だけに、用事のあるメンバーもいた。それは仕方のないことだった。
その事情がわかる彩佳は、友紀に微苦笑を返す。そこへ、窓の外から小さく鴻池の声が飛んできた。
「あ、鴻池クン来たんかな」
彩佳がその声に気づいて、窓へ歩み寄る。
と。
「ばあっ!!」
「うわあああああっ！」
彩佳は腰を抜かさんばかりに驚いた。
鴻池は、窓の外から現れたのだ。
繰り返すが、ここは３階。

鴻池は、2階と3階の間にある、20センチほどの庇のような部分にへばりついていたらしい。
「ハッピーバースデイ、島さん」
「あ、朝からいたの～？」
まだ尻餅をついたまま、彩佳はそう笑顔で聞く。毎度のことながら、この鴻池には驚かされることばかりだ。
「んじゃ」
鴻池はそう言うと、再び窓の外に消える。
「これを」
そう言って再び姿を現すと、その手には大きな花束が乗っていた。
「え？」
色とりどりの花で飾られた花束が、彩佳の手に渡る。彩佳は戸惑ったままその花束を見つめた。
今まで、誰かに花束などもらったことはない。
初めてのことだ。
「島さん、花好きやろ？　俺と大石からや」

「ありがとう！」
彩佳(あやか)は笑顔を爆発させた。
ほんの少し、これを渡してくれるのが大石だったらなとは思う。
「お～す」
それを見計らったかのように、部室の入り口から声がした。
大石のものだ。
「おっす！」
相棒の鴻池(こうのいけ)は反応が早い。さっさと部室に飛び入って、何事もなかったような顔をしていた。
「この時期にバースデーケーキなんて、予約もなしで苦労したで」
「別にサンタの乗ったヤツでもよかったのに」
そう言いながらバースデーケーキを置く大石に、友紀(ともき)は苦笑いしながらそう言う。彩佳(あやか)はただ恐縮するばかりだ。
「あ、そや」
そう言いながら、大石は彩佳(あやか)を振り向いた。
「まだ言うてへんかったな。誕生日おめでとう、島」

「ありがとう…」
彩佳は、もうそれだけで感無量だった。
もう、他にはなにもいらない気がした。
「さ、始めよ！　島ちゃんは上座にいき！」
陽が彩佳をそう促す。
彩佳は頷いて歩き出した。
鴻池は、カメラを取り出す。
大石がケーキを取り出し、友紀は17本のローソクをそのケーキの上に並べた。
「おし、点けんで」
大石の手で、１本１本ローソクが灯っていく。
彩佳には、そのローソクが今まで歩んできた時間に見えた。
このローソクが１本増えるたびに、また今までの時間を振り返ればいいのだ。
今はそう思えた。
それなら、誕生日も悪くはない。
17歳になるのも悪くない。
来年もきっと、この人のいい仲間たちは誰かの誕生日をこうして祝うのだろう。

その時に、自分もまた参加しているはずだ。
おなじように誰かを祝うはずだ。
そう確信できる、仲間たちの笑顔だった。
「ハッピバースデートゥーユー、ハッピバースデートゥーユー」
ロウソクが全部灯ると、音楽専攻の陽と鴻池が歌い出す。その声に、友紀と大石も続いた。その歌声が胸に温かい。
「さ、消せ！」
友紀に促され、彩佳は軽く頷いてから一気に吹き消した。16本が消え、1本だけが残った。まるで、今の自分の気持ちを象徴するかのように。
彩佳はじっと残った1本を見つめる。まるでこれからの1年を祝福するかのように、その炎は揺れた。
（ばいばい、16歳…。よろしくね、17歳）
彩佳は心の中でそう思いながら、最後の1本を吹き消した。
拍手が起きる。
「さあ、食うで！」
「待ちや、大石！　島ちゃんが先やろ！」

「え～」
「『え～』やないの！　あんたの甘いモン好きはみんなよう知っとお！」
ケーキを切り分ける陽（ひなた）と大石の間で、そんなコントが繰り広げられる。この光景も、みんなの笑顔も、この場所もあと1年したらなくなってしまうのだ。だったら、この1年を思いきり楽しもう。
「やっほ～！　島ちゃん、誕生日おめでとう！」
声に入口を振り返ると、和美（かずみ）、晴子（はるこ）、今日子（きょうこ）、横田の四人がいた。今日は来られないはずの四人だった。
「和（かず）クン、ウメちゃん、コンちゃん、横田クン！」
彩佳（あやか）の目が喜びを含んで見開かれる。
「みんなで連絡しおうたんや。ほしたら、少しやったらなんとかなりそうやから、ちょっとだけやけど参加さしてな」
和美（かずみ）の言葉に、彩佳（あやか）は大きく頷く。
胸が温かい。
この温もりが、なによりもバースデープレゼントだ。
この温かい仲間たちが、宝物だ。

「あ、大石が一番でかいの取っとお」
「うっさいなあ、大音(おおと)は！　俺はケーキが好きやの！」
「島ちゃんのやのに、なに企画側が一番エエの取ってん」
「その分、大石クッキー食われへんけどな」
「うっさい、横田！」
「ウチも大きめのちょうだ～い」
「わ～、きれ～な花束～」
「俺ポテチのコンソメとジンジャーエールキープな～」
「あ、ウチそのクッキーちょうだい！」
八人が揃うと、一気に賑やかになる。
いつもの部室がそこにあった。
彩佳(あやか)は、その様子を笑顔で見ていた。
「どった、島ちゃん？」
その様子に声をかけてくる友紀(ともき)に、彩佳(あやか)は微笑む。
「これからも、ずっとこのままでいれるかなあ」
その問いに、友紀(ともき)は満面笑顔を浮かべる。

「そりゃあ、そうや。なんせあたしらは仲間なんやから」
その言葉に、彩佳(あやか)は微笑む。
和美(かずみ)と仲の良い大石を見るのは少し辛い。だが、それも含めてこの仲間なのだ。そして、誰も欠けてほしくはない。このままでいたい。
その思いは、かなえられるように思った。
「さあ、乾杯しようぜ！」
自分の取り分に一番大きなケーキを取った大石が、そう杯を掲げる。残りのメンバーもおなじようにジュースの入ったコップを掲げた。
「はい、幹事」
「あたし!?」
大石に突然振られた和美(かずみ)は思わず狼狽(うろた)える。そのコントのような様子にみんな笑った。
「え～と…。とにかくおめでとう、島ちゃん！　17歳にようこそ！　乾杯！」
「かんぱ～い！」
紙コップがぶつかる。その中に大石の「それだけかよ！」と言うツッコミも混ざった。
ガヤガヤとパーティは始まる。
彩佳(あやか)は、仲間たちの顔を一人一人眺めた。

かけがえのない仲間たち。
宝物。
（これからもヨロシクね、みんな…）
心の中の思いを飛ばす。
島彩佳(あやか)の17歳は、こうして始まった。
心の中にあった不安は、もうなかった。

あとがき

久しぶりのオリジナル小説です（笑）

「ぼくらのＭＡＮＫＥＮ事情」シリーズとしては、00年の「ＭＡＮＫＥＮ事情ＦＩＮＡＬ」以来の完成原稿だったりします。わはは。

この話は、まだ僕が漫画描きとして活動していた91年に、個人誌として発行しようとしていた漫画原稿を元に、もう一度練り直して書きました。元々が４ページの漫画だったのですが、奇面組の同人誌「Winter Wish」でやったように、漫画原稿やネームを元にするとイメージが先に出来上がっているので、けっこうさっくり書けたりします。キャラクターは当時のままで書き上げたので、その後リストラされてしまったり統合されてしまったキャラも、そのまま出てきています。そういう意味では、ＭＡＮＫＥＮ事情であってＭＡＮＫＥＮ事情でないのかなあ。

元ネタは、彼らと同じ２年の時に、この話の主人公・彩佳（あやか）のモデルになった仲間の誕生祝いを部室でやったことに端を発しています。そんな当時の仲間たちの雰囲気を出せたらなあと思いながら書きました。

オリジナルも、また力を入れなきゃなあと思います。

さあ、頑張っていくか。

追伸

Tさん、ご婚約おめでとう！

06.07.25　Ver.1.00　Update

06.07.31　Ver.1.10　Update